第４学年　外国語活動学習実践

○学年の取り組み

①毎時間のゴールを示し、具体的な見通しをもたせる

「今日は○○を覚えた」「○○ができた」という感動こそ、さらなる意欲と上達につながっていくと考える。そこで毎時間「今日は○○を覚えるよ」など最初に見通しを伝え活動を行い、体験的な理解に結び付けていく。

②繰り返し語彙や表現に慣れ親しむ活動

HRT と ALT の掛け合いやリアクションを通して、子どもたちがつい口に出したくなるような語彙、表現を多用していく。その際、子どもたちが確実に覚えられるよう、クイズやゲームを通して繰り返し使っていく。また、担任と ALT とのデモンストレーションの後にクラスを半分にわけ、片方を ALT 役、片方を HRT 役にして練習し、今度は数人のグループ、次はペアで、と子供たちが話す場面を工夫していくことで、話すことへの壁を下げていく。

③既習の表現を使う場面の設定

友達とのコミュニケーションをゲーム感覚で挑める場面設定を単元の内容に応じながら繰り返し行っていく。うまくできない子には担任や ALT が寄り添ったりして「通じ合えた」経験を積んでいく。児童の実態やその場の状況に応じながら、慣れ親しんだ既習の表現を使って友達や ALT に話が伝わる喜びや楽しさをたくさん味わわせることで、子どもたちが進んで友だちと関わり、思いや考えを伝え合えるようにしていく。

○子どもの姿（成果と課題）

①具体的な見通しを持たせることの取り組みの一つとして、授業の流れを毎時間同じにした。具体的な見通しがつくので、子どもたちは安心して取り組むことができた。また、内容に関しても「外国の人に道案内ができるようになりたい」など課題意識をもって取り組むことができていた。

②「話すことに対する壁」という面では、たとえばチャンツなどで声が小さいときは、担任との勝負形式やゲーム形式にすることで子どもたちは意欲的に取り組んだ。勝つ(勝たせる)と自信を得て、その後は生き生きと歌ったり言えたりするようになった。同じ英語表現を繰り返し使っていくことも有効で、子どもたちは自信をもって声を出すようになった。

課題としては、ALT の問いかけを理解できない子が一定数おり、担任のフォローがないと動けない児童もいる。視覚優位と聴覚優位の児童が混在する教室では、絵カードを提示したり、英語の音声を繰り返し浴びさせたり、どちらか一方に重点に置きがちなので、実態に合わせてバランスよくやっていきたい。